



釜石との関わりの背景にあるもの

聖学院大学ボランティア活動支援センター 所長
人間福祉学部 教授
阿部 洋治

2014 年度、発足 3 年目を迎えたボランティア活動支援センターは将来に向けての新たな発展の基盤を備える年度になりました。その第一は、2011 年 12 月以来続けて来た被災地釜石の人々との関係です。被災地でのボランティア活動が減少傾向にあると言われている中で、本学の学生たちはより一層関心を深めつつあります。4 月の「桜プロジェクト 3」には 25 名の学生が参加(内 1 年生 5 名)、8 月の「よいさプロジェクト」には県立常盤高校生徒 11 名と共に 25 名の学生が参加(内 1 年生 13 名)、さらに 12 月の「サンタプロジェクト 4」には学生 40 名(内 1 年生 21 名)が参加。こうしたスタディツアーをきっかけに、長期休暇を利用して、教育プログラム、漁業体験、仮設住宅でのお茶っこサロン等々の活動に、自発的に参加する学生たちが出て来ました。そして、何よりも特筆すべきことに、釜石でのボランティア活動に 4 年間関わって来た卒業生の一人は、3 月の末、釜石の復興に関係したいという一念から、内定していた関東での就職を断って釜石市内での仕事に就くことになりました。

ところで、これまで私たちは「復興支援」という名目の下に釜石との関係を続けて来ました。しかし、振り返って見ると、釜石との継続的関わりの根底にある原動力は、釜石の人々との触れ合いでありました。ボランティアスタディツアーに参加した多くの者たちは、人々との触れ合いを通してより一層釜石の風土、伝統、文化、歴史というものに関心を寄せるようになります。ですから、釜石訪問はボランティアというだけではなく、大切な人々との触れ合いのためであり、風土、伝統、文化を味わうためなのです。学生たちは、そのように釜石と向き合うことを通して、失われていた大切なものを見出し、自分自身を確立することになっているのです。

このように聖学院大学の学生たちが釜石を大切な場所としてますます関わりを深めつつあることを嬉しく、また誇りに思っております。学生たちがこのように育っているのは何よりも釜石の方々のお蔭であります。しかし、私は、聖学院大学のボランティア活動支援センターの働き手たちの学生たちに対する配慮を忘れることができません。内に閉じ籠もりがちな学生たち、何かを掴みたいと願いつつもそこへと向けて乗り出して行く勇気やきっかけを掴めないでいる学生たち、そうした学生たちにそっと寄り添い、彼らがそこから立ち上がり外へと出向き、人々や社会に触れながら、自分自身と向き合えるようになることを願って、時間を惜しまず一人ひとりと向き合っております。学生たちが、ボランティア活動を通して変わりつつある背景にはこうした取り組みがあるのです。今回の報告書の「特別編集」に掲載されている座談会はそのことの証でもあります。